

ひょうごの遺跡

昭和60年2月15日発行
 兵庫県教育委員会
 社会教育・文化財課
 兵庫県埋蔵文化財調査事務所
 〒652 神戸市兵庫区荒田町
 2丁目1番5号
 Tel(078)531-7011(代)

〔題字 教育長 井野辰男書〕

方形周溝墓と住居址を検出した遺跡 60. 3.-9

寺中遺跡は、淡路の洲本市納字寺中^{おさめ}に所在し、本州四国連絡橋公団による淡路縦貫道建設に伴い、昭和59年2月から6月にかけて発掘調査を実施した遺跡です。遺跡は弥生時代中期（約2000年前）から室町時代の人々が、生活した集落跡です。

洲本平野の北端を画する先山山塊の裾には、低く平らな台地が広がっています。この台地上には、多くの遺跡が知られており、寺中遺跡もその一つです。周辺の水田より約5～7m高くなった台地の先端に位置し、台地の縁は急な崖となっています。台地下の北側を奥畑川が流れ、南側は細長い谷となっています。

遺跡の広さは約10,000㎡ほどと思われますが、今回は道路予定地の内にあたる約6,000㎡を調査しました。調査地の中央付近には南側の谷から分かれた小さな谷が入り込んでいます。そこ

でこの谷より台地の先端側をA区、台地の奥側をB区としました。

検出された遺構

A区では、竪穴住居址6棟、掘立柱建物址1棟が検出されています。竪穴住居址は弥生時代中期のものが1棟、後期のものが5棟で、後期のものには平面の形が円形と方形のものがみられます。円形住居址には5～6回も建て替えられたものがあり、一般の住居址とは異なった、集会所等に利用された家屋かもしれません。

B区では弥生時代の遺構として、竪穴住居址4棟、方形周溝墓6基、掘立柱建物址2棟が検出されているほか、奈良時代の土壇、室町時代の掘立柱建物址、柱穴群等を発掘しました。

竪穴住居址4棟は全て円形ですが、弥生時代中期のものが1棟含まれています。残りの3棟は弥生時代後期のもので、A区の円形の住居址



B区全景



A区全景

とほぼ同じ時期のものと思われます。3棟とも直径が約9.5～10mもあり、A区の住居址よりも大きく、当時としては規模の大きい住居址です。また2棟は住居址の中央に土壇があり、それを貫いて、住居址を二等分するように、小溝が屋外に向ってのびていました。

方形周溝墓は台地の北斜面にあたる地区で検出されています。6基のうち全体のわかるものは5基で、最大規模の2号は長方形状を呈し、長軸が約20mもあります。その他は一辺が約11～16mで、平面の形は1号が長方形のほかは、ほぼ正方形に近い形をしています。2号と3号は隅の部分で溝を共有し、3号の溝の中からは皮袋のような形をした土器が出土しています。方形周溝墓群と竪穴住居址とを区画するような施設は特になく、おそらく台地の北斜面に方形周溝墓群、台地頂上部の南側の日当りの良い場所に竪穴住居址群というふうに、地形によって区画されていたものと思われます。

掘立柱建物址は2棟とも弥生時代中期のもので、台地奥側のものが、3×2間、他は5×2間の大きさです。奥側のものは柱穴内から石鏃等が出土し、この時期のものと考えて間違いのないものです。5×2間の大きさのものは、当時のものとしては規模が大きく、柱穴内からは中期の特徴をもつ土器が出土していますが、疑問が残ります。

遺跡の特徴

以上が寺中遺跡の主な遺構です。検出された弥生時代中期から室町時代に及ぶ遺構の中で、この遺跡を特徴づけるのは、弥生時代後期の遺構です。墓である方形周溝墓と住居である竪穴住居址とが同じ遺跡内で発見される例は少なく、それもほぼ同じ時期か非常に近接した時期のものが検出されたことは重要なことです。弥生時代後期後半の集落のようすや、社会のしくみを考えるうえで貴重な資料となるものです。

なお、遺跡は調査終了後、一部はやむを得ず削り取られましたが、他は山砂で覆って保護し、料金所の下に埋められることになっています。



竪穴住居址内土器出土状況

県下の周溝墓

周溝墓とは、方形あるいは円形に溝をめぐらし、その内側を盛り土によって高くし、そこに遺体を埋葬した墓で、溝を方形にめぐらしたものを方形周溝墓、円形にめぐらしたものを円形周溝墓と呼んで区別しています。一般的には方形周溝墓の検出が多いのですが、県下では弥生中期の太子町川島遺跡、後期の伊丹市口酒井遺跡を始め、8例の円形周溝墓の発見が目立っています。埋葬には木棺、土器棺、箱式石棺、土壇などがあり、一つの周溝墓内に1～5、6体が埋葬される例が多くあります。周溝墓の大きさは15～16m以下のものが多いのですが、中には20mをこえるものもあります。

このような埋葬方法は弥生時代の前期に始まり、古墳時代にも続いてつくられています。つくられた地域も九州地方から東北地方までの広い地域におよんでいます。しかし古いものは近畿地方に多く知られ、新しいものは九州・関東地方に多く知られています。こうした周溝墓に埋葬された人々は、集落内の有力な家族であろうと考えられています。

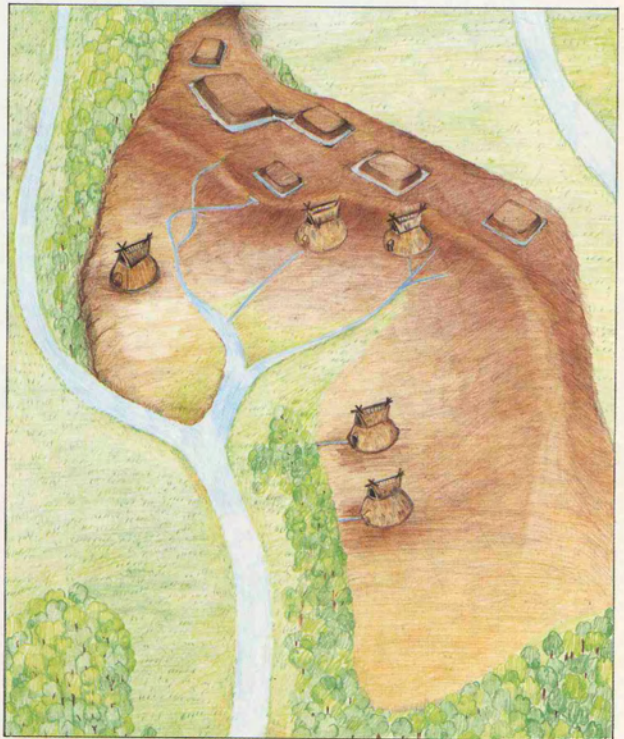
県下では現在21遺跡が知られ、このうち18遺跡までが弥生時代中期のものです。最も古い例は洲本市の武山遺跡で弥生時代中期前半、最も新しいものは尼崎市の田能遺跡で古墳時代前期のものです。埋葬施設は伊丹市の原田西、口酒井遺跡、尼崎市の田能遺跡では木棺が残っていました。また養父郡八鹿町の米里遺跡では小児用と考えられる小さな箱式石棺が検出されています。

副葬品はほとんどないものが多いのですが、田能遺跡では首飾りに使われた玉類と、銅釧(腕飾り)が出土しています。

このように県下でも、各地域で当時の有力家族の墓といわれる周溝墓がみられるということは、弥生時代以降の各地域の発展過程を考える上で重要な資料を提供しているものと思われます。



方形周溝墓、土器出土状況(溝内)



寺中遺跡想像図

県下周溝墓検出遺跡一覧表

	遺 跡 名	所 在 地	形	数	時 代
1	田 能 遺 跡	尼崎市田能 (たのう)	方 方	1 2	弥生中 古墳前
2	原 田 西 遺 跡	伊丹市岩屋 (はらだにし)	方	12	弥生中
3	口 酒 井 遺 跡	伊丹市口酒井 (くちさかい)	円	1	弥生後
4	加 茂 遺 跡	川西市南花屋敷 (かも)	方	11	弥生中
5	栄 根 遺 跡	川西市栄根 (さかね)	方	2	弥生中
6	西 山 遺 跡	三田市貴志 (にしやま)	方	1	弥生中
7	郡 家 遺 跡	神戸市東灘区御影町郡家 (ぐんげ)	円	2	弥生後
8	森 北 遺 跡	神戸市東灘区森北町4丁目 (もりきた)	方	1	弥生中
9	楠・荒田遺跡	神戸市中央区楠町6丁目 神戸市兵庫区荒田町1丁目 (くすのきあらた)	方	1	弥生中
10	田 中 遺 跡	神戸市西区玉津町田中 (たなか)	方 不定形	1 7	弥生中
11	新 方 遺 跡	神戸市西区玉津町高津橋 (しんぽう)	円 方	2 1	弥生中
12	国分寺台地遺跡	姫路市御国野町国分寺 (こくぶんじだいち)	方	1	弥生中
13	八 幡 遺 跡	姫路市船津町八幡 (やはた)	方 円	1 1	弥生中
14	川 島 遺 跡	揖保郡太子町川島 (かわしま)	方 円	2 1	弥生中
15	玉 屋 遺 跡	神崎郡福崎町八千種 (たまや)	方	1	弥生中
16	米 里 遺 跡	養父郡八鹿町米里 (めいり)	円	1	弥生中
17	奥 藤 遺 跡	出石郡但東町奥藤 (おくふじ)	円	1	弥生中
18	藤 岡 山 遺 跡	多紀郡篠山町藤岡山 (ふじおかやま)	方	1	弥生中
19	七 日 市 遺 跡	氷上郡春日町七日市 (なぬかいち)	方 円	4 2	弥生中
20	武 山 遺 跡	洲本市宇山 (たけやま)	方	1	弥生中
21	寺 中 遺 跡	洲本市納 (じちゅう)	方	6	弥生後

一回メモ 火災と文化財保護法

昭和20年、敗戦によってもたらされた経済の混乱と人心の荒廃は文化財の保護にも悪い影響を与えました。

それは、文化財を守るよりも日々の生活をどうするかの方が目先の問題だったからです。そのために貴重な文化財の海外流出をはじめ、絵巻物が分断されて売られたり、あるいは放置されていたため損傷するなど、数多くの文化財が不幸な運命をたどりました。

国民は額に汗して懸命に戦後の復興に全力を傾けている最中、昭和24年1月26日早朝、

衝撃的な事件が起きてしまいました。

日本文化の最高の誇りである法隆寺金堂の壁画が失火により焼失、続いて、愛媛県松山城、京都市鹿苑寺金閣が放火により焼失する事態となりました。このような貴重な文化財が次々と消滅する中で、生活に迫られていた国民は、あらためて事態の重大さに気づきました。昭和25年「真実一路」「路傍の石」の作者、山本有三氏らを中心とした議員の努力により制定されたのが、文化財保護法なのです。また、1月26日は文化財防火デーとされ、今年で31回目を迎えました。

遺跡散歩

— 洲本市周辺 —

〈交通機関〉

洲本港より海沿いに南へ徒歩10分で淡路文化史料館。新加茂橋へはバスターミナルより「福良」方面行きて約10分。

今回は洲本市内と国道28号線に沿う、いくつかの遺跡を駆け足で紹介しましょう。

淡路島の歴史について興味のある方は、まず淡路文化資料館を訪ねてみて下さい。島内の製塩遺跡や国分寺の紹介から人形浄瑠璃の解説まで、島の歴史が一目でわかります。

史料館周辺の遺跡では、西隣の税務署で弥生時代末の石棺が発掘されました。また、西方の竹原川沿いには、長さ8.5mの横穴式石室をもつ物部の曲田山古墳や、死者を埋葬した際に横穴式石室を密封した状態のよくわかる明田丸山古墳があります。

明田丸山古墳の東方約500m、三熊山の南斜面には御城山窯址があります。江戸時代中頃から幕末の窯でよく残っています。

今度は国道沿いに遺跡を見て行きましょう。新加茂橋のバス停より北へ約1km歩くと私立柳学園に着きます。校門を入って坂を登りきった右手に下加茂岡遺跡があります。弥生時代中・後期の遺跡で、発掘された住居址が当時の状況で保存されています。また、グランド南隅には緑泥片岩製の石棺が露出した下加茂岡古墳、グランド北側の山林には、群集墳が点在しています。三角緑神獣鏡が出土したコヤダニ古墳もこの山林の西斜面にありました。

下加茂より西には、約2kmで下内膳遺跡、更に西には大森谷遺跡、森遺跡そして今回紹介している寺中遺跡と、弥生時代の遺跡が国道の北側の丘陵上には点在しており、ここ数年間にいずれも調査が行われました。

下内膳遺跡は弥生時代中



曲田山古墳石室

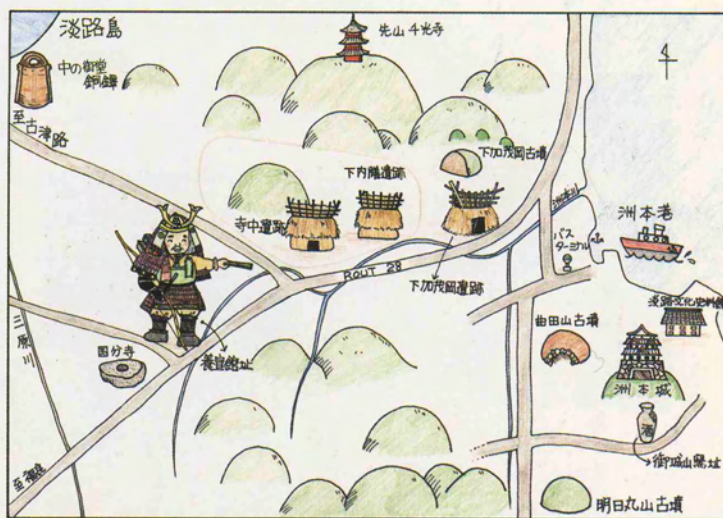
期から中世までの複合遺跡です。昭和53年に発掘され、住居址などが見つかりました。現地の加茂小学校には周辺で見つかった土器が展示してあります。

時間があれば三原平野へ出て見ましょう。

養宣には、室町時代の守護・細川氏の居館址である養宣館。国分には、淡路国分寺址・国分尼寺址があります。

養宣館址は下内膳遺跡より西へ約8km、養宣のバス停の北方約1kmにあります。室町時代の長方形館址で、淡路国守護・細川氏の居館でした。周囲をめぐる土塁がよく残っています。

養宣の西約2km、国分に淡路国分寺址があります。塔心礎の他10個の礎石が残っており、往時の面影を物語っています。



洲本市周辺の遺跡

遺物整理作業

兵庫県教育委員会が行う埋蔵文化財の調査件数は年々増加の一途をたどり、出土する遺物も毎年、コンテナ（60cm×40cm×15cm）の数にして、3,000箱を超えます。埋蔵文化財調査事務所では、出土遺物の整理、復元作業を行い、発掘調査の成果の公刊、公開に努めています。ここでは、遺物の整理作業がどのようにして行われているかを簡単に説明しておきましょう。

一度遺物整理の見学に当事務所を訪ねてみませんか。

①

水洗い



器物についている文様などを消さないよう注意しながら、付着した土を洗い落します。

②

ネーミング



出土遺物の1点1点に遺跡名、出土地区、土層名などを記入します。

③

接合



遺物の多くはバラバラになった状態で出土します。同じ個体の破片を探して接着します。

④

復元



もとの遺物の形に復元します。破片が足りない部分については石膏で補います。

⑤

実測



遺物の形、大きさ、文様などを平面図に正確に投影して表現します。

⑥

拓本



写真や肉眼では不鮮明な変化も、凸凹があるものならば正確に表現することができます。

⑦

トレース



遺物や遺構図を整図したものに原稿を加え、レイアウトして印刷所へ送ります。

⑧

展示



整理の完了後、その成果を一般の方々に広く見ていただきます。